

外科の「常識」素朴な疑問 50

安達 洋祐 編集

その「当たり前」は本当に正しいのか？

大阪大学大学院教授・消化器外科学

森 正 樹

これまで外科学の中で当たり前と考えられてきたことに対し、本当にそうか？ という素朴な疑問を投げかけ、それを多くの医学論文で検証し、その成果を本にまとめたのが安達洋祐先生です。安達先生は医学という硬くなりがちな分野に、柔らかな発想で新しい感覚の本を提供し続けています。これらの本は多くの若い医師の心をつかみ、愛読する外科医が急増していると聞いています。その安達先生がまたもやってくれました。雑誌『臨床外科』の「外科の常識・非常識：人に聞けない素朴な疑問」という連載を1冊の本にしたのです。

本書は今までの安達先生の本と同様に、とてもインパクトが強く、なるほどと思わずひざを打ちたくなる場所が多々あります。序文に記されているように“将来、外科の歴史を振り返るときの‘里程碑 milestone’になると自負している”ことが、うなずけます。本当に痒いところに手が届く内容で、若い医師だけでなく、指導者にもぜひ一読していただきたいと思います。そして間違いなく読む価値のある本です。

その題目の一部を挙げると、“風邪にうがいは有効か”“腹膜炎手術

でドレーンが必要か”“手術後のCT検査は必要か”“胃腸切離断端の消毒は必要か”“乳癌手術は生検後2週間以内か”“手術野の消毒は必要か”“抜糸はなぜ7日目か”“減圧ストーマは結腸が標準か”“鼠径ヘルニアの手術は必要か”など本当に素朴な疑問が並んでいます。しかし私たちの多くはそのような疑問を感じても、先輩から引き継いできた外科の歴史の中で、検証することなく従来の方法を踏襲してきました。あらためて“それはなぜか？”と問われて、“どうしてだろう？”と思う内容ばかりです。安達先生を筆頭にその分野で活躍中の若い先生が関連の医学論文を探して吟味し、質問に小気味よくコンパクトに答えているため、わずかの時間で読破することができます。慣習としてやってきたことが本当に正しいのか、あらためて考える癖をつけてほしいとの編者の願いが具現化された本と言えます。そしてそのような志こそがよりよい医療の提供につながっていくと期待していると思います。

また国立病院機構九州医療センター名誉院長の朔元則先生や済生会八幡総合病院院長の松股孝先生などのベテランが安達先生とともに「番

外編」として12編のエッセーを書いています。“外科医に異動は迷惑か”“医師は理系か”“外科医は単なる職人か”“‘先生’に‘御侍史’は必要か”など、執筆者らの長年の思いが凝集されており、大変読み応えがあります。(安達先生はもとより)朔先生、松股先生ともに、文筆家顔負けの素晴らしくわかりやすい、そして含蓄のある文を書かれますが、その実力がいかんなく発揮されています。思わず少し立ち止まって考える内容ばかりです。小さな疑問を題材にしていますが、その奥には大きな問題を含んでいます。ちょうど冰山を見るような具合です。これからの若い外科医がこれらの問題をも解決してくれるだろうとの期待感が感じられます。

安達先生は、若い外科医が自ら考えることができ、そしてサイエンスとしてみても正しいことができる医師に育ってほしいとの強い願いを持っています。この本はそのような観点で書かれており、ぜひ一読をお勧めします。

●A5 頁216 2009年 定価3,150円
(本体3,000円+税5%)

— 医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)